

みもと MIO MACH ケンチクさんぽ vol.21

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

元町商店街の誕生

元町商店街は神戸市の北は再度山、南は神戸港、西はJR神戸駅、東はJR元町駅の間に位置している約1.2kmの商店街です。約150年の歴史があり「元からあった町」「神戸の元になった町」とのことで「元町」と呼ばれています。通りは平安時代に整備された山陽道で京都と下関を結ぶ西国街道と呼ばれて、大名行列も通ったそうです。

田畑の中を通るさびしい西国街道でありましたが、江戸時代末期には神戸村、二つ茶屋村、走水村という3つの村があり、220戸が軒を連ね、街道沿いにいろいろなお店が並んで賑わっていたようです。この賑わいが時

代を経て商店街へと発展していきました。神戸が開港(「大輪田泊」その後「兵庫の津」と呼ばれ、慶応3年(1868年)に神戸港として開港)した時から外国人居留地ができ、その周辺に店が集まってきました。西国街道沿いにも人が集まり発展し、明治の初めに大手、札場、城下、八幡町などの町名がつけられました。明治5年(1874)5月20日にその一帯が兵庫県令・神田孝平の命により「元町通」と改称され、この日が神戸元町商店街の誕生とされています。

明治16年(1883)頃から大正時代にかけて商店街あげての誓文払い(バーゲン)がおこなわれ11月の中旬の1週間、どの店も入口が隠れるほどの商品を積み上げ、定価の4~5割引きで販売し大いに賑わったそうです。

人が集まり、町ができてくると、建築も時代と共にその土地の環境と生活スタイルに合わせて形が造られ、在り方も変化していくものです。しかし、建築が人間にとって安全で安心して生活でき、心がふれあい、安らぎを覚えらるるものでなければならぬということとは変えてはならないと常日頃考えています。少し前までの元町は、華美ではなく、重厚で、それでいて周辺の環境にどけ込み、ふと心に残る、安穩とした通りであったと思っています。まだまだ、その雰囲気は残っているものの、現在では時代の流れとはいはうものの、人の目を引くため?の作りのお店ができ、昔の記憶を思い抱いている私には少し残念な気持ちで通りを過ぎていきます。



明治後期(4m道路が10m近くになった)



大正初期の元町通1丁目



昭和12年の元町通4丁目

災害

1938年(昭和13年)7月3日から7月5日にかけて、神戸市及び阪神地区で阪神大水害が発生しました。激しい雨は4日夕刻に一時収まりましたが、5日午前1時頃から5日13時頃まで大豪雨となりました。この3日間で降水量が最も多い時には60.8mm/h、総降水量は六甲山で616mm、市街地の神戸測候所(後の神戸海洋気象台→神戸地方気象台)でも461.8mmに達し、阪神間の広い地域で400mmを超える大雨となりました。神戸は山と海が近く六甲山から急な勾配で海に流れる川が多いため、元町通りもその影響で膝下まで浸かるほど水が溢れていました。



元町商店街への水の流入を堰止め

元町商店街

大水害からの復興後、1939年(昭和14年)第二次世界大戦が勃発し、大戦末期の1945年(昭和20年)3月17日には神戸市の西半分の地域が、更に6月5日には東半分の地域が無差別攻撃による爆撃で壊滅しました。その当時の写真には人々が消火ホース



元町3丁目方面から西方面を望む



消火の様子

をもち火災の発生した商店に放水している状況が写っています。

人々の協力による消火活動にも関わらず多くの商店、住宅が焼け落ちました。

その後、1995年(平成7年)に淡路島北部沖の明石海峡を震源とした兵庫県南部地震が発生し、近畿圏の広域が被害を受けました。震源に近い神戸市中央区、兵庫区、長田区、須磨区は被害が甚大でした。

死者が6434人、住宅被害が約64万棟の巨大災害に。2月14日、政府は「阪神・淡路大震災」と呼称しました。

元町商店街も一部の店舗は全壊し、アーケードは倒壊しなかったものの修理で数億円に上る被害を受けたそうです。交通機関が不通となったため、人通りも少なく、商店街は人々に元気が出るように、遅くまで灯りをつけていたそうです。

水害、戦後の復興と同様に、商店が震災から立ち直るのは早く、震災1週間後頃から再開し始め、2週間後には半分以上の店舗が開店。プロパンガスを使ってうどんを作り100円で振るまったり、衣料品を半額以下で販売するなど、被災者の生活を応援するための破

格値のバーゲンが続いたそうです。それを知り、元町商店街の人々の市民に向けた心配りのエールに感謝し、奉仕の心のある町と人々であることに感動いたしました。

建築は、大雨、地震等の自然災害を受けると、その度に建物を造る為の「構造基準」や「消防基準」が変わっています。元町界隈も木造の建物が多かった時代から石造りの建物、鉄筋コンクリート造の建物へと変わっています。1981年には「新耐震基準」により「許容応力度計算」「保有水平耐力計算」という構造計算方法が取り入れられ、壁、柱がバランスよく配置された設計が求められるようになり地震に強い建物になりました。それでも、1995年の阪神・淡路大震災では建物が倒壊することは少なくなったものの被害を受けた建物も多くありました。人間の力に影響されない大自然の怖さを知りました。

建築は人間が自然と共生しながら、発展していくことを決して忘れてはならない事だと思っています。

出典 参考文献:「写真集 神戸100年(神戸市)」

「むかしの神戸(神戸新聞総合出版センター)」

「月刊神戸っ子(KOBECCO)」等



戎 孝之(えびす たかし)

株式会社黒田建築設計事務所 勤務
一級建築士/JIA会員